

藤無山〈ふじなしやま〉（大屋町若杉）

藤無山（一一四二メートル）は、但馬〈たじま〉と播磨〈はりま〉の国境にあるコニーデ式火山です。昔は、故墨土介嵩〈こぶしがだけ〉といったこの山は、次の伝説によって藤無山というようになったのです。

昔、出雲〈いずも〉の国（鳥取県）の大国主〈おおくにぬし〉が故墨土嵩〈こぶしだけ〉へ来ると、揖保〈いぼ〉川をさかのぼって来た天日槍〈あまのひぼこ〉に出会いました。不思議〈ふしぎ〉に思った大国主がたずねました。

「わたしは、出雲を治〈おさ〉めている大国主です。あなたは、誰で、どこへ何しに行くのです。」

「わたしは天日槍。わが住む土地をさがして但馬へまいります。」

「それは、こまります。但馬には、わたしの家来がわたしの行くのを待っているのです。」

大国主のことは物静かで、ていねいではあるが“但馬は、わが領土〈くに〉”とする強い気魄〈きはく〉が感じられます。日槍〈ひぼこ〉も負けてはいません。

「わたしは、天皇のお許しを受けています。だから、どこへ行ってもよいのです。」

と、いって、一步もひこうとは、しません。二人は、にらみ合いの形になってしまいました。

一つの国を二人が争う。それを解決するには、力によるほかに方法のない時代のことです。二人はじっと考えました。何とか、話し合いで解決したかったのです。しばらくして、大国主がいいました。

「二人が争っては、大勢の者がこまります。但馬に誰がいくか？それは、明日神さまにきめていただきましょう。」

「神さまの仰〈おお〉せには、わたしも従〈した〉がいます。神さまの仰せは、どうして聞くのです？。」の問いには、

「石に一メートルほどのフジづるをつけ、その端を持ってふりまわして投げる。石は三つ。神さまのお心のままに飛んで、但馬に落ちた石の多い方が、神さまのお心にかなった、但馬のあるじ、としまししょう。」という大国主の考えに、日槍も賛成して、二人は、仲よく山をおりました。

あくる日、二人は約束どおり、フジづるをさがしながら故墨土介嵩〈こぶしがだけ〉へ登りました。しかし、不思議なことにフジは一本も見当りません。しかたなく、フジづるの代〈かわ〉りにクツバ（クス）かずらを使って、めいめい三つの石を投げました。すると、大国主の石は二つ、日槍の投げた石は三つとも、但馬に落ちたので、但馬には、日槍が来ることになりました。そして、この時から今にいたるまで、一本のフジもないので藤無山というようになり、その後、ゆかりの場所（山頂）に藤無神社を建てて、宍粟郡〈しそうぐん〉一宮町公文〈くもん〉・同郡波賀町〈はがちょう〉道谷〈どうだに〉と大屋町若杉の三部落でお祭りをしていました。（享保四（一七一九年）年に宮分けをした）

なお、日槍の投げた石は出石町に落ち、宮内の出石神社は、天日槍〈あまのひぼこ〉を祀〈まつ〉り、但馬の一ノ宮として、但馬人の信仰〈しんこう〉を集め、大国主の投げた石は、八鹿町浅間〈葛〈かずら〉神社、祭神は素盞鳴尊〈すさのをのみこと〉一大国主の父？）日高町上ノ郷（気多神社、祭神大己貴命〈おおなむちのみこと〉一葦原志許乎命〈あしはらのしこおのみこと〉・葦原醜男命〈あしはらのしこおのみこと〉一は、大国主の別名）に落ち、今一つは、宍粟郡一宮町三方（加都良〈かつら〉神社）に落ちた。ということです。